ちっご「ふれあいの里づくり」事業

～５地区の取組について～

令和５年３月

筑後市協働推進課

目次

ちっご「ふれあいの里づくり」事業について・・・・・1

・事業の背景・目的

・事業の内容

各自治組織ごとの計画時点の課題・取り組み・成果・現在の課題

・北長田自治組織・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

・新溝自治組織・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

・蔵数自治組織・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10

・野町自治組織・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14

・徳久自治組織・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18

全体のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22

・事業の主な成果

・今後の課題

・これから

ちっご「ふれあいの里づくり事業」について

○事業の背景・目的

国、地方を問わず厳しい財政状況や社会環境の変化の中で、住民ニーズは多様化し行政に求められるものも多種多様になっている。一方、地域を見ると、住民のライフスタイルや価値観の変化、少子高齢化、都市化などから人間関係が希薄になってきており、地域活力の低下が見受けられる。

これからは、住民と地域そして行政が信頼関係を醸成し、それぞれが自立し、かつ果たすべき役割を自覚し、協力しながらまちづくりを進めていくことが重要である。

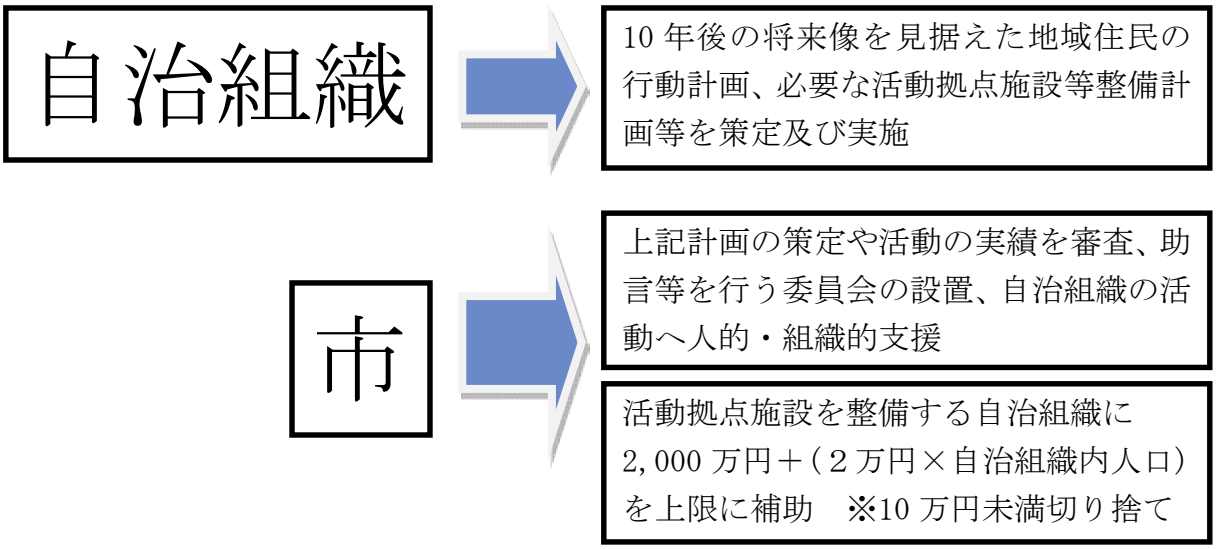
ちっご「ふれあいの里づくり」事業は、地域住民みんなで議論しながら地域の将来計画を策定し、その実現に向けてみんなで行動することにより、行政と住民の意識改革やまちづくりの基盤である地域の自立と地域民主主義の確立を図り、「市民が主役のまちづくり」をめざすため平成 15 年に開始した。

○事業の内容

「ふれあいの里づくり」事業を行う自治組織は、10 年後の地域の将来像とその実現に向けた 10 年間の地域住民の行動計画、そのために必要な活動拠点施設等整備計画などを定め、計画を実施する。

市では、住民の行動計画に基づく活動への人的・組織的支援と活動拠点施設等整備への財政支援を両輪として自治組織への支援を行うほか、自治組織の計画やその実績を審査する委員会を設置する。

事業の発足から、５つの自治組織（北長田地区、新溝地区、蔵数地区、野町地区、徳久地区）が事業の承認を受け、それぞれの 10 年間の活動計画および各地域で話し合った将来像の実現のため活発な活動が進められてきた。



北長田自治組織

「北長田、みんな、いきいき、大家族」

（計画実施期間：平成１６年７月１４日～平成２６年３月３１日）

①　計画当時の地域の課題

・年齢構成の変化により、少子高齢化対策を早期に行う必要がある。
　特に高齢者が自宅から外に出て気軽に集える場所の設置や、子供たちを地域で育てる地域意識の向上を図ることが必要である。
・小学生が別々の学校へ通うことにより、地域としての人のつながりが希薄になってきているため、子ども及び保護者の交流が必要である。
・来訪者がリピーターになるような、そして北長田に住みたくなるような自然・伝統・文化が豊かな地域の継承と人との触れ合いを大切にする地域づくりが必要である。

②　取組の概要

【子どもの育成】

　子どもたちを地域ぐるみで育てることを柱として、特に子どもたちが集団性や社会性を身につけることを目的に、北長田ふれあい館を拠点に各種ふれあい活動等を計画的に実施し、交流の場を提供した。

【健康と福祉】

　区内での孤独死をなくし、高齢者が安心して暮らせるよう、地域デイサービスや一人暮らしの方とのふれあいやネットワークづくりを行うだけでなく、北長田ふれあい館に設置したふれあい広場を有効に活用し、高齢者の外出機会の創出、子どもとの交流ができるよう高齢者が気軽に集える場を提供した。

【農地を利用したふれあい事業】

　農業を通じて、人と人との繋がりを形成することで集落機能の基盤づくりを目的として、高齢者による農作物栽培指導を取り入れた子どもたちの農業体験、区内ミニ農園の設置、郷土食材を活用した料理教室などの農業を媒体としたふれあい事業を実施した。

【伝統・文化の継承】

　老松神社を中心として行われる伝統行事について、高齢化や少子化の影響による参加者の減少する中で、伝統文化の継承を目的として区内の子どもから大人まで全員参加の呼びかけを行った。
　また、将来を担う子どもたちと一緒に各行事に取り組むとともに、高齢者の指導による子どもたちへのしめ縄づくりなどで世代間の交流や技術の継承をしながら、地域ぐるみで伝統文化の保存、継承への取り組みを実施した。

通学学習

餅つき体験

③施設整備事業費用及び市補助額

施設整備費用			補助額
土地代	建設費	備品等	
43,167,443			26,000,000
0	42,000,000	1,167,443	

④　10年間の取組の成果

・事業前ではできなかった子どもから高齢者までの交流活動を積極的に進めることや、各事業への参加者が増え地域行事を活気づかせることができ、大変有意義なものとなった。特に左義長を復活させることができたことが大きい。
・「北長田ふれあい館」ができる前は、会議等の室内で行う事業は、区長宅や冷暖房設備のない公民館で実施していた。冷暖房付きの大きな施設ができたことにより、デイサービス等の室内で行う事業を充実させることができた。野菜売りなどの新規の事業を行うこともできた。
・「北長田ふれあい館」ができたことにより、それまで積極的に取り組めなかった日頃の世代間を超えた交流、区外も含めた多くの住民とのふれあい活動を行うことができるようになった。
・１０年間の取り組みは地域住民の取り組みを含め大変であったが、住民が地域に対する姿勢は前向きなものになり、地区行事等に対しても積極的に協力が得られるようになった。
・事業との相関関係は不確かではあるが、事業開始当初は３人だった児童が事業終了時点には９人に増加した。
・今後も「北長田、みんな、いきいき、大家族」を将来像として掲げ、これまで努力してきた各事業の良いところを継続しながら、地域住民が互いに助け合い、日頃から活き活きとふれあう中で、ここに住んでよかったと思う地域を作っていきたい。
・北長田の最大のイベントである「左義長」は年々参加者が増え、取り組みに活気が出ているが、他の地区では実施する会場や参加者の減少の心配がある。このため、左義長に関しても今後校区の取り組みとして検討することも含めて、校区コミュニティ協議会との連携を図り、今以上に参加者を増やすことを考えている。
・「北長田ふれあい館」について、今までどおり子どもから高齢者までふれあえる交流施設として活動の拠点として積極的な活用をするとともに、管理運営面についても区予算に施設管理費を計上していくなど計画的な運用を実施していきたい。

農業体験

左義長

計画当時の課題の経過

高齢者が気軽に集える場所や、子供たちを地域で育てる地域意識の向上が必要 → 地域デイサービス事業や、世代間交流を入れた農業体験等を実施 → 子どもから高齢者までの交流活動を積極的に進めることができ、地域が活性化した

異なる小学校に通う子ども・保護者の交流が必要 → 北長田ふれあい館を拠点に子ども同士や親子を対象とした各種ふれあい活動を実施 → 交流の機会の創出とともに、社会性、集団性を身につけることができた

自然・伝統・文化が豊かな地域の継承と人との触れ合いを大切にする地域づくりが必要 → 農地を利用したふれあい活動や伝統行事を通じて、世代間の交流や技術の継承を実施 → 伝統行事を通して、世代間の交流や技術の継承ができた

デイサービス

グラウンドゴルフ

生き物調査

ラジオ体操

⑤ 現在の取り組み

・通学合宿や農業体験は、他の行政区も行うことから、区単独で実施するよりも校区コミュニティで実施するほうが効率的と判断し、現在校区コミュニティ協議会の行事として行っている。
・地域の伝統行事である左義長は、事業終了後も区が継続して行っている。
事業当時から役員が総替わりしたにもかかわらず、上記の事業ほか、しめ縄づくり、防犯防災パトロール、見守り活動、グラウンドゴルフなど、１０年間の事業当時と同様の事業を現在も行っている。コロナ禍であっても、食事は持ち帰りでデイサービスを行うなど、工夫をしながら現在も多くの活動を継続できている。

新入生の手形リリーフ作成

石塔

⑥ 現在の課題

・左義長は、現在の実施場所である市有地が売買され県南公園になる予定であり、今後の実施場所を確保しなければならない。
売買後の実施場所が確保できなければ、左義長を中止にせざるを得ない。
・財政面がかなり厳しい。使用料等の歳入が少なく、区費においても、区民から金額を下げてほしいとの要望があるが、世帯数がなかなか増えないため困難な状況である。
ふれあい会館会計にて、修繕が発生した場合を見込んだ施設管理費を計上しているが、大規模修繕が必要になった場合の対処を考えなければならない。
・北長田は、高速道路のインターチェンジやＪＲ船小屋駅へのアクセスであったり、道路の整備状況等、区の立地は決して悪くないにもかかわらず人口がなかなか増えない。
下水道が整備されていないことも一つの要因ではないかと考えている。

北長田ふれあい会館

ふれあい会館での会議

新溝自治組織

「みんなが集う活気の里、新溝区」

（実施期間：平成１８年４月１日～平成２７年３月３１日）

①　計画当時の地域の課題

・田園地帯で稲作中心の農家が多いが、専業農家の減少や兼業農家の増加によって働きに出ていく若者が多く、農家と地域との繋がりが希薄になっている。
・全国や筑後市全体と比較してかなり高い高齢率となっており、さらに高齢化により活気がなくなる懸念があるため、元気な高齢者を増やす努力と家にこもりがちな高齢者の交流や支援ができる仕組みが必要である。
・道路脇には、ポイ捨てされた空缶・空瓶が見られ、あちこちにゴミの山があり、魅力ある地域とは言い難い状況である。
・新溝天満宮と新宮があり、365年ほど前の創建からいろいろな伝統行事が行われていたが、若者の減少などにより、廃れている。
・八女ICから船小屋に通じる道路等の県道市道が開通したことにより利便性が向上した一方で、子どもや高齢者の交通事故が危惧されているほか、地域での災害への取組といった安心安全なまちづくりへの取り組みが必要とされる。

②　取組の概要

【魅力ある里づくり】

クリーン作戦を毎年２回以上の実施、デイサービスや家庭で作った園芸品をしんみつ館や公民館へ展示のほか、郷土の行事である彼岸籠りを子ども会を中心にしんみつ館で実施した。

【活気ある里づくり】

ラジオ体操や自主トレーニング室の活用、グラウンドゴルフ、料理教室、子ども部屋の設置・活用、卓球クラブを実施した。

【安全安心の里づくり】

登下校に送り迎えのあいさつ、交通指導、一人暮らしに声掛け運動や隣近所と密接な連絡などの取組を実施したほか、自主災害対策組織をつくり、災害に備えた日常を送れるようにした。

【その他の関連活動】

ふれあいの里づくり事業開始前から行っていたデイサービスやカラオケ教室をしんみつ館で行うことで、福祉や公民館的な活動が十分にでき、「魅力ある里づくり」や「活気ある里づくり」に大きく貢献することから、活動の支援を行った。

また、昔から行われてきた行事は、全住民の協力や参加により、ふれあいの関心を高めることができ、これらを継承していくことで「魅力のある里づくり」や「活気のある里づくり」に貢献することから、行事の継承、継続を行った。

クリーン作戦

グラウンドゴルフ

③施設整備事業費用及び市補助額

施設整備費用			補助額
土地代	建設費	備品等	
31,980,514			26,000,000
8,187,400	23,691,827	101,287	

④　10年間の取組の成果

・10年間行ったふれあいの里づくり事業は、行政区でそのまま引き継ぐこととした。活動に必要な予算についても、そのまま行政区の予算に引き継ぎ、事業の総括も永続的に行えるよう行政区役員である評議員に引き継ぐこととした。

・公民館に隣接したしんみつ館ができたことにより、事業開始前から実施している活動に加え、様々な新規の活動を行うことができ、自分達の住みやすい環境づくりにつながる活動にすることができた。実施前はふれあいの里づくり事業への反対の声もあったが、10年経った後では、しんみつ館で活動を行うことが当たり前となっている。

・今後重要になってくるのは、校区コミュニティとの連携である。
10年間、区で様々な活動をしていたが、必要に応じて校区コミュニティの事業に移管する等、柔軟に活動の形を変えていくように意識を変えていかなければならない。

・人口減少は、全国的なものであるが、古川校区は特に減少率が高く、事業を終えた平成28年度時点の古川小学校の児童数は100人以下となっているが、新溝集落内の人口は306人（H17）⇒325人（H27）、学齢の子ども15人（H17)⇒16人（H27）と、人口を維持している。

・古川小学校に通う児童の子ども会加入率は100％を維持しており、親世代を含む集落行事への参加が浸透している。人口の減少に歯止めをかけている一因として、一度は区を離れた者が結婚やこの進学を機に、新溝に戻ってくるケースが近年多い。このことは、住む者にとって少なからず魅力があるためであると思われる。

彼岸籠り（伝統行事）

ラジオ体操

料理教室

交通指導

計画当時の課題の経過

人付き合いの希薄化	子ども達の集団性や社会性を身につける活動、高齢者の交流活動等様々な交流活動を実施	事業前から行っていた活動に加え、新規の活動を通して地域が活性化した
高齢化・人口減少	地域デイサービス、子ども部屋の開放等、各世代に合わせた様々な活動を実施	人口の減少率が高い古川校区の中で人口を維持できた
伝統行事の衰退	郷土の行事である彼岸籠りを子ども会を中心にしんみつ館で実施	伝統行事の継承や、世代間の交流ができた
道路脇にポイ捨てされた空缶・空瓶等、ゴミが散見される	クリーン作戦を毎年２回以上実施	環境保全に努めることができた
道路の整備による交通量の増加に伴う事故や、災害時への対策が必要	登下校の交通指導、隣近所と密接な連絡等の取組の実施や、自主災害対策組織を結成	安心安全のまちづくりを行い、地域で災害に備えることができた

作品展

料理教室

⑤ 現在の取り組み

・クリスマス会・クリーン作戦・夏祭り・デイサービス等多くのふれあいの里づくり事業は、行政区で引き継いで実施しているが、通学合宿など活動内容に応じて校区コミュニティに移管しているものもある。
ラジオ体操など現在は行っていない活動もあるが、時代の変化に合わせて活動内容も柔軟に見直していきたい。
・しんみつ館は、行政区等の総会、校区福祉会や民生委員向けの学習会、老人クラブの行事など、多くの人数を要するイベントや避難所として活用しているほか、事業取組期間当時では少なかった校区コミュニティでの活用も多い。
・令和元年に冷暖房を整備し、活動の範囲が広がった。
・コロナ禍に伴いしばらく実施ができていないが、落ち着いたら地域の旅行等を行っていきたいと考えている。
・しんみつ館は、地域避難所になっており、地域の防災拠点としても重要な役割を担っている。

研修会

卓球クラブ

⑥ 現在の課題

・コロナ禍でも工夫をしながら活動を行っているが、地域全体の交流を目的とした活動が現在行えていない。
「みんなが集う活気の里新溝区」のスローガンのもと、コロナ禍後に新たな事業を行う必要がある。
・高齢になっても仕事を続ける人が増え、役員の選出に難儀している。
そのため役員は輪番制を採用しているが、ノウハウを熟知した役員が育たない。
・近隣の工場に勤務する外国人住民が増えているが、広報の配布以外で接点がない。
外国人との交流を踏まえた活動を行う必要がある。

しんみつ館正面

防犯講話

蔵数自治組織

高齢者　おとな　こども
「一、二、三世代、支え合い　いかし合うまち蔵数」

（実施期間：平成２０年４月１日～平成３０年３月３１日）

①　計画当時の地域の課題

・小学校は南部集落に近いところで、中学校や公民館は北部集落に近いところに位置しており、「子ども達が安心して遊べる所が少ない」「小学校が遠いので安全面に不安がある」といった子ども達の安全を危惧する声が挙がっている。
・少子高齢化の進行、産業構造の変化や都市化による核家族世帯の増加等によって、世代間のふれあい、特に高齢者と子どもの接する機会が少なくなっており、地域の活力が低下してきている。
・近年では新興住宅が増え、病院も数件開業されて便利になってきたことに伴い、蔵数区の活動を魅力的にし、活性化し、世代をこえた古くからの住民と新しい住民との融和を図りながら、いきいきと明るく活力あるまちにする必要がある。
・区民のふれあい場としての公民館の老朽化や使い勝手の悪さを改善する必要がある。

②　取組の概要

【健康と福祉を増進する】

蔵数運動会・グラウンドゴルフ大会（年１回）、ラジオ体操（春～秋の期間中の日祝・盆を除く毎日）、デイサービス（月２回）、料理教室（年10回）、趣味のサークル活動を実施した。

【高齢者の生きがいと子供の健全育成をはかる】

敬老祝賀会、高齢者研修会・昔話を楽しむ会（それぞれ年１回）、あいさつ運動（下校時）、安全安心のまちづくり・安全標語募集（年１回募集）を実施した。

【豊かな自然を大切にする】

花いっぱい運動・花苗の植付け（夏・冬の２回）コスモスの種まき、梅ちぎり、廃品回収（いずれも年１回）、あき缶等の回収（年２回）、川と水を守る運動（年１回）を実施した。

【世代をこえてふれあえる場を提供する】【伝統と文化を大切にする】

一二三ルームおよび広場での農産物等の販売（毎週土日）、たけのこ掘り、竹細工、伝承遊び（それぞれ年１回）、図書コーナーでのお話し会（年２回）、初詣（１月１～３日）、夏祭り、伝統行事「もぐら打ち」「ほっけんぎょう」、蔵数文化祭（それぞれ年１回）を実施した。

蔵数運動会

高齢者福祉大会

③施設整備事業費用及び市補助額

施設整備費用			補助額
土地代	建設費	備品等	
50,000,000			37,000,000
0	47,009,000	2,991,000	

④　10年間の取組の成果

・平成２１年に「たけのこ会館」及び「スポーツ公園」が落成したことにより、活動に弾みがついた。
蔵数区自体が明るく元気になったように感じられる。
・月２回の定例会議（たけのこ推進委員会）を中心に議論を繰り返すことで、様々なアイデアが生まれた。
徐々に区民の理解も進み、積極的な協力が得られるようになった。
・目的と目標のPRにより、「区民が主役のまちづくり」を実感している。
広報誌「たけのこ」誌上や各イベント等、事あるごとにPRを行ったことで、区民一人一人が「区民が主役のまちづくり」を実感できる雰囲気が生まれた。
・ふれあいの里づくりを通して区民同士の顔見知りが増えた。
また、たけのこ会館が地域避難所になり、住民の防災への意識向上も感じられた。
・以前の公民館では手狭できなかった文化祭を開催することができるようになった。
文化祭を始めた当初は、展示パネルを市立病院等の市の施設の所有物等を借用して実施していたが手続が煩雑であった。そこで区民の手製で自前の展示パネルを作製したことにより、効率的に文化祭を開催できるようになった。
・活動費の捻出を工夫して推進委員会で活動費を稼ぎ出しながら経費節約にも努めた。一方で、本事業の遂行に弾みをつけるような出費には躊躇なく投資した。
それらのことが、本事業の活性化につながった。
・子どもの保護者への参画意識の向上を促したことより、保護者の積極的な協力が得られるようになった。それに伴い、見違えるように子ども達のマナーが良くなり、各イベントへの参加者も増え、何よりも子ども達の表情がいきいきとしてきた。
・「たけのこ掘り」や「ほっけんぎょう」など環境の変化等により、残念ながら継続不能なものもあるが、効率よく、効果的なものを中心に本活動を継続していくことを確認した。今後は新しい切り口を模索しながら、むしろ変化していくべきであると考えている。
・「一二三世代　支え合い、いかし合うまち蔵数」という基本理念を、ぶれずに末永く継続していくことが大切と考えており、この10年を一つの通過点として、活動がさらに進展することが期待される。

蔵数文化祭

地域デイサービス

計画当時の課題の経過

子ども達の安全を危惧する声が挙がっている	安心安全のまちづくりのために、あいさつ運動や標語募集の実施	区民の安全意識向上が図られるとともに、痴漢や誘拐などの事件や交通事故等が発生しなくなった
少子高齢化に伴う世代間交流の減少	高齢者研修会の１つとして子供たちを交えた昔話を楽しむ会や運動会などを実施	世代間の交流の機会が創出され、地域が活性化した
老朽化した公民館の使い勝手の悪さ	たけのこ会館及びスポーツ公園を竣工	以前の公民館では構造上デイサービスの内容を制限せざるを得なかったが改善され、また、文化祭が開催できるようになった
新興住宅が増え、古くからの住民と新しい住民との融和を図る必要がある	運動会、球技大会など、区民全体向けの活動を実施	古くからの住民と新しい住民との融和を図る機会を創出できた

たけのこ会館　ロビー

⑤ 現在の取組

・この数年は、新型コロナの影響で多くのイベントを中止や規模の縮小等をせざるを得ない状況だったが、令和４年の春には３年ぶりに運動会を実施する等、地域のイベントを再開し始めている。
・文化祭、川と水を守る運動、夏祭り等、事業当時行っていた活動の多くを現在も行っているが、「たけのこ掘り」「しめ縄づくり」「竹細工遊び」等、竹が必要な活動は、宅地が増加してきたことに伴い竹林が激減し、実施が困難になった。
しかし、ふれあいの里づくり事業の10年間はあくまで通過点であり、当時と同じ内容を実施するのではなく、時代の変化に合わせて事業の在り方を見直していく必要があると感じている。
・子ども達が大人になって、蔵数で育ってよかったという想いを持ってほしいと考えている。そのため、ふれあいの里づくり事業は子ども達を活動に参加させることに大きな意義があると考えている。
子どもの活動への参加の促進は、子ども会主体で積極的に行っている。

たけのこ会館　正面

たけのこ会館　玄関

⑥ 現在の課題

・土日に家庭農園で採れた野菜を売買する野菜市を開催しているが、供給する農家が減ってきている。
・コロナ禍で長期的に様々な活動を中止にしていたが、その期間に区に転入してきた新たな住民も多く、活動を再開して受け入れてもらえるか不安がある。
活動への参加者の固定化は、コロナ前からあった課題であるが、新しい住民に活動を浸透させていかなければならない。

調理室

夏祭り

野町自治組織

「我が野町、交流のまち、支え合うのまち、ふれあいのまち」

（実施期間：平成２２年４月１日～令和２年３月３１日）

①　計画当時の地域の課題

・新しく住民となった人と従来から住んでいる住民との交流や、子どもから高齢者までの世代間交流の機会がない。
・小学生が３小学校へ分散して通学し、子ども会も小学校単位で作られているため、地域内の子ども同士・親同士の交流が希薄になっている。
・子どもたちが安心して遊べる公園広場、野町住民全体が集まることのできる規模の公園、グラウンドがない。
・区中心部の道路、交差点や２０９号線の交通量が多いため、それぞれの学校へ通う子どもたちが安全に、安心して通学できる住民全体で見守っていく仕組みづくりが必要である。

②　取組の概要

【子ども育成部会】

子育てサロンについては、年始に行う餅つき等、季節に応じたイベントを実施した。

その他の取り組みとして、水田焼やピザ焼きといった創作体験や、ふれウンド（交流館横グラウンド）で行う昔ながらの遊びやドローン飛行体験や、綿花、スイカ等の栽培、ソーメン流し、キャンドルナイト等を通して３小学校へ分かれて通う子ども達の交流の場をつくった。

【健康・福祉部会】

多世代交流ゲーム等の児童との交流を行う活動を含む地域デイサービスを年12回実施したほか、農園での農業体験、ふれウンドで毎日ラジオ体操を行った。

【交流スポーツ部会】

毎日のラジオ体操の後にグラウンドゴルフを、毎週土曜日に卓球教室を交流館で実施した。また、年４回開催するグラウンドゴルフ大会では、子どもから高齢者まで楽しめるふれあい交流行事となっている。このほかふれウンドにて区民の運動会を実施した。

【環境・安全部会】

花づくり活動、安全運動活動及びクリーン作戦の３事業を実施した。

花づくり活動は、花いっぱい運動（年２回）、環境美化運動（年24回）等

安全運動活動は、朝の挨拶運動（月１回）、下校時見守り（月３回）、夜間パトロール（年５回）、防火訓練・防災避難訓練（各年１回）等

クリーン作戦は、クリーン作戦（偶数月）、リサイクル回収（月２回）、川と水を守る運動（年１回）等

ラジオ体操

新入生歓迎会

③施設整備事業費用及び市補助額

施設整備費用			補助額
土地代	建設費	備品等	
44,631,540			44,549,753
28,910,100	14,350,400	1,371,040	

④　10年間の取組の成果

・広い施設（交流館・農園・ふれウンド）ができて、実施できる事業の幅が広がった。
・平成29年には区民からの厚意で寄贈いただいた156坪の土地を駐車場に整備できたことにより、さらに事業を活性化できた。
・近隣の類似した施設に水田コミュニティセンターがあるが、遠いので移動手段がない高齢者は利用が困難である。高齢者にとって区内の施設の存在は大きい。
・施設の維持管理（資金面含む）は大変だが、この事業で行政区が活気づいた。集まって活動ができる場所があることは大きい。
・子どものラジオ体操をきっかけに事業に参加するようになった若い新住民もいる。
・役員の部会長の体制を見直し、10年間実施してきた事業は、公民館活動として継続していく。広報についても、「ふれあいの里づくり広報」から「公民館だより」として発行を継続していく。
・水田焼の窯元が役員を兼ねて指導をしているので、今後のために技術の引継ぎもしていきたい。
・「我が野町、交流のまち、支え合うのまち、ふれあいのまち」のキャッチフレーズのもと、今後も区民同士の交流を深めていきたい。
ラジオ体操の参加者の固定化や、デイサービスのボランティア確保など、対応していかなければならない課題もある。

子育てサロン

地域デイサービス

ふれウンドでのピザ焼

クリーン作戦

計画当時の課題の経過

従来からの住民と新しい住民の交流や、子どもから高齢者までの交流の機会がない	ラジオ体操、運動会など、子どもから高齢者を含めた区民全体に向けた活動を実施	区民全体が交流できる機会を創出できた
３小学校へ通学している地域内の子ども同士・親同士の交流が希薄	創作体験や、グラウンドで行う昔ながらの遊び、栽培等、子どもを対象とした活動を実施	異なる小学校へ通学する子ども同士の交流の機会が創出できた
子どもたちが安心して遊べたり、住民全体が集まることができる公園、グラウンドがない	ふれウンドを整備	子ども達が遊んだり、多くの住民を集めて行う活動の場所が確保できた
子どもたちが安全・安心な通学ができる住民全体で見守っていく仕組みづくりが必要	安全運動や子どもとの交流を行う活動を実施	子どもを地域で見守る雰囲気が事業開始前と比べて格段に出てきた

ふれウンド及び交流館（上から）

⑤ 現在の取組

・ふれウンドができたことで、コロナ禍においてもある程度事業を継続することができている。ただし、運動会や芸能大会は、実施会場である総合福祉センターのコロナの利用制限があり実施できていない。今後は室内での事業も活性化していきたい。
・ラジオ体操やグラウンドゴルフ、卓球教室を盛んに行っており、地域の健康づくりに寄与しているように感じる。しかし、子ども会主体の夏休みのラジオ体操がコロナを理由に実施されていない。子どもが来れば親世代も参加するのではと考えている。
・陶芸教室は事業経費等の問題があり継続できていない。代替でピザ焼を実施している。
・広報は引き続き「公民館だより」として月１回発行しているが、コロナ禍により活動を中止にせざるを得ない時期は発行が困難になることがある。

ラジオ体操

卓球教室

⑥ 現在の課題

・役員にしても参加者にしても限られた人員が参画している現状であり、人員の確保が課題である。60代は基本働いており、70代も働いている人が多い。若い人は共働きが基本となってきている。事業開始の時から時代変わっており、時代に合わせた事業を行っていく必要がある。
・陶芸教室の後継者問題はクリアできていない。専門性が高いことであるため、難しい問題である。
・若い人の参画が少ない。
区内の宅地が急増していることに伴い、若い人も増えているため、ぜひ活動にも参加してほしい。
・異なる小学校同士の交流はコロナ禍に伴い減ってしまった。
通学先が１つになればいいと考えている。

ふれウンドから交流館

交流館入口

徳久自治組織

「声かけ合い　笑顔あふれる福祉の里　とくひさ」

（実施期間：平成２４年４月１日～令和４年３月３１日）

①　計画当時の地域の課題

・徳久地区は、筑後市の中心地で交通の利便性が高く、生活環境に恵まれた大変住みよい町であり人口も増加傾向であった。
このような環境の中で、従来の居住者と新規の居住者との交流や世代間交流といった住民同士の関わりが希薄になってきている。

②　取組の概要

【区民の集いの場を確保し、住民交流・世代間交流を図る】

従来の区民と新しい区民との交流や、子どもから高齢者までの交流を図る事業でもあり、徳久区のシンボル事業としていた「区民文化祭」を毎年開催した。作品展の他に子どもたちがポスターを作ったり、バザー・屋台・サークル発表会を実施した。

また、グラウンドゴルフ大会及び夏祭りを毎年実施し、区の行事として定着している。

【子どもの健全育成と高齢者の生きがいを図る】

子育てサロン事業や、子ども会活動、夏祭り（夏祭り踊り大会・子ども神輿・竹灯籠作り・そうめん流し）、区民文化祭などの行事を通して、子ども同士や子ども・大人間との交流の場を増やした。

また、地域デイサービスの実施や、高齢者世帯への見守りや声かけ等、高齢者への支援を行った。

【自然環境を大切にし、ごみ減量化・再資源化に取り組む】

徳久区に住んでいる自覚を持つように地域住民みんなで水路や道路、公園などの清掃、資源ごみ回収や廃棄物の再資源化に取り組んだほか、廃油を利用した石鹸・ホウ酸団子づくりや、ごみ減量化についての学習会を実施し、区民の意識を高めた。

【伝統文化を継承し、地域コミュニティをつくる】

約230年の歴史をもつ徳久天満宮の事業を中心に様々な世代の参加を得て、座祭り・子ども神輿や夏祭り・年末年始の祭礼・新一年生安全祈願祭等に取り組んだ。

また、近年では、新事業として徳寿会と子ども会による天満宮の梅の実ちぎりを実施している。

【安全安心の町づくりを目指す】

登下校時の見守り、夜間防犯パトロールなどを計画的に取り組んだ。

また、地域の防災情報マップを作成し、避難訓練の際に活用した。

グラウンドゴルフ

そうめん流し

③施設整備事業費用及び市補助額

施設整備費用			補助額
土地代	建設費	備品等	
57,006,351			46,000,000
10,000,000	44,100,000	2,906,351	

④　10年間の取組の成果

・事業を行うにあたり、住民の賛同を得ることが大変だったが、拠点施設ができたことにより様々な活動を行うことができた。
以前は団地の集会所で活動を行っていたが、小さい施設で、多世代では使えなかった。
ふれあい会館で活動を始めてからは、参加者が様々な世代で増えた。
・平成24年度～30年度までの７年間は、筑後市の提唱する「市民が主役のまちづくり」に合わせて、「区民が主役のまちづくり」に注力し、できるだけ多くの徳久区民の方々に参加していただけるように事業の拡大・参加者の増加に注力してきた。
・８年目にあたる平成31年度からは、コロナ禍の影響により事業の拡大や参加者の増加を図ることが困難となった。
そこで事業の原点に返り、「声かけあい　笑顔あふれる　福祉の里　とくひさ」の実現に向けて（徳久地域デイサービスの充実）事業を重点課題として取組を実施した。
・８月の神輿・踊り大会は、区の行事として定着した。
・子どもの交流の場を増やし、地域の人々とふれあいながら仲を深めたことにより、様々な活動の場で高学年の子どもが低学年にやさしく声をかける等、子ども同士が関わりあっている姿を数多く見かけられるようになった。
・約230年の歴史をもつ徳久天満宮での事業等の伝統行事に対し、区民の理解や協力を得ることができた。
・登下校の見守りを通して子どもたちのあいさつや会話が弾むようになった。
また、羽犬塚小学校だよりに挨拶運動の記事が掲載された。

密を避けたデイサービス

ホウ酸団子づくり

夏祭り

クリスマス会

計画当時の課題の経過

交通の利便性が高く、生活環境に恵まれた町であるが、住民同士の関わりが希薄

区民文化祭をはじめ、グラウンドゴルフ大会の大規模事業を実施	子ども会活動、夏祭り等子どもの交流事業を実施	清掃活動、廃油を利用した石鹸・ホウ酸団子づくり、学習会を実施	徳久天満宮の事業等、伝統行事を実施	登下校時の見守りや夜間パトロール等の実施
↓	↓	↓	↓	↓
子どもから高齢者までの世代間交流の場を設けることができた	活動の場で、子ども同士が関わりあういる姿を数多く見かけられるようになった	区民の交流が図られるとともに、環境保全への意識が向上した	伝統行事を継承していくことができた	安心安全のまちづくりを行うなかで子ども達とのあいさつや会話が増えた

区民文化祭

ラジオ体操

⑤ 現在の取組

・ふれあいの里づくり事業を実施したことにより、各部会の活気が出た。
10年間の計画実施期間は終了したが、事業は継承して行っている。
活動実施期間と同じ内容の活動ではなく、役員会で協議しながら、形を変えながら継続している。
・平成31年度末から、コロナ禍に伴い老人会、デイサービス、福祉会の活動等を中止にせざるを得ない状況が続いていたが、今では工夫しながら実施している。
・グラウンドゴルフ大会、夏祭り踊り大会、文化祭は、開始当初と比べると大規模になった。
・当初課題としていた新住民と旧住民の交流については、夏祭りの神輿をアパート周辺でまわすといった地域活動のアピール等、活動参加への取り組みを行っている。

デイサービスでの消火訓練

デイサービスでのコロナ対策

⑥ 現在の課題

・地域の担い手が高齢化しているが、70代でもまだ働いている人が多く、役員の担い手や参加者が限られる。まずは活動に参加してもらわないと担い手探しができない。活動への声掛けの仕方に工夫が必要である。
・様々な分野で多様性が言われる時代となり、従来通りの運用のままでは地域コミュニティの運営は難しくなると感じている。
・ふれあいの里づくり事業に携わった人でないと拠点施設を含めたまちづくりの経過を知らない。
今の若い人達がやがてまちづくりに携わるので、これまでの経過を次世代に伝えていくことが大切と考えている。

徳久ふれあい会館

ふれあい広場

全体のまとめ

ちっご「ふれあいの里づくり」事業（以下「事業」と表記）を実施したことによる成果や令和５年現在の課題について、以下のことが挙げられる。

【事業の主な成果】

〇既存事業の充実や新規活動の実施

・デイサービスの充実、野菜売り事業（北長田）
・デイサービス、カラオケ教室の充実、子ども部屋の設置、地域避難所（新溝）
・デイサービスの改善、運動会、文化祭、野菜市の開催、地域避難所（蔵数）
・水田焼創作体験、農園での農業体験、ラジオ体操、卓球教室の実施（野町）
・夏祭り、区民文化祭（徳久）

〇新・旧住民、世代間交流の機会の創出

・高齢者と子どもによる農業体験、郷土食材を活用した料理教室（北長田）
・通学合宿の実施（新溝）
・昔話を楽しむ会、運動会・球技大会、夏祭り、文化祭の実施（蔵数）
・年４回のグラウンドゴルフ大会、昔ながらの遊びやドローン飛行体験（野町）
・グラウンドゴルフ大会、夏祭りでのそうめん流しや竹灯籠作り（徳久）

〇伝統文化の保存・継承

・左義長の復活（北長田）
・子ども会を中心とした彼岸籠り（新溝）
・もぐら打ち、ほっけんぎょう（蔵数）
・徳久天満宮での座祭り、こども神輿（徳久）

地域活動に必要な拠点施設（館、公園、グラウンド等）ができたことにより、地域活動が活性化し、計画当時に抱えていた様々の課題の解決につながっている。また、各地区が課題を解決するための話し合いや実践を通して、住民の地域に対する理解も進み、積極的な協力も得られるようになり、地域の自立が図られた。

【今後の課題】

○時代の変化に合わせた事業のあり方の見直し

・ウィズコロナ・ポストコロナにおける事業展開の検討が必要である。
・諸事情により実施が困難になった、あるいは困難となる見込みの事業がある。
（左義長の実施場所の確保：北長田、たけのこ堀り等：蔵数）
・多様性が言われる時代に、従来どおりの運用のままでは運営が難しくなる。（徳久）

○担い手の問題

・高齢者になっても仕事を続けている人が増えている。
・担い手の高齢化や役員、参加者が固定化している。
・地区内の人口が伸び悩んでいる。（北長田）
・若年世代の増加はあるが、参画が少ない。（蔵数、野町）

○その他

・施設の大規模修繕が必要になった場合の財政面に問題がある。（北長田）
・外国人住民との交流が必要である。（新溝）
・事業の経過を次世代へ伝えていくことの必要性がある。（徳久）

１０年間で時代が変化し、現在では継続が困難になった事業や実施するためには検討が必要な活動も出てきている中、コロナ禍の影響も加わり、状況に応じた新たな取り組みを行う必要性が生じている。

一方、共働き世帯、高齢者の勤労割合の上昇により、役員及び地域活動への参加者の範囲が狭まり、固定化してしまっている。役員については、高齢化している地区も多く、次世代の担い手を確保していくために運営のあり方の見直しなどの検討を行っていく必要がある。

また、長期に事業を自粛せざるを得なかったコロナ禍の間に、多くの住民の転入があった地区もある半面、人口の伸び悩みを抱えている地区もあるが、いずれにしても交流の機会の少なかった住民に対し、地域活動への参加を働きかけていく必要がある。

○これから

市ではこれまで、ちっご「ふれあいの里づくり」事業を実施してきた５地区に対して、将来像を見据えた地域活動や拠点等整備の計画策定を促し、その実現に向けた人的・組織的支援や財政的支援を実行してきた。

令和３年度をもって、すべての地区において事業の計画期間である 10 年間が終了したため、これまで行ってきた自治組織から市への事業報告や委員会での審査等を要しなくなる。ついては、今後、地域活動が知らず知らずのうちに暗礁に乗り上げてしまうことのないよう、引き続き、地域活動の実態把握や地域への支援に努めていく必要がある。

また、本総括に際しては５地区に対してヒアリングを実施し、先述したように事業開始時にあった多くの課題を解決することができたものの、新型コロナウイルスの発生や共働き・高齢者の勤労割合の増加、地域行事等の参加者の固定化など、新たな課題も生じてきており、運営のあり方の見直しやＩＣＴを活用した新たな事業体制等の検討も行っていかなければならない。

事業を通して培われてきた住民自治の基盤を基に、今後もより一層、地域が発展していくためには、自発的に地域の課題を解決していく自治組織が必要であり、その活動を継続・進化させていくことも欠かすことはできない。

これからも市としては、地域と連携して、住みよいまちづくりをすすめていくため、地域の状況把握を行いながら、それぞれの地域の実情に沿って、必要な支援を実施していくことが重要である。